

# 乗馬を始めました！！

国際部 山本倫寛

東京の、とある乗馬クラブで乗馬を始めました。ただ実際には「再開」というべきでしょうか。というのは、私が商社マンとして英国に駐在当時、ロンドンから南西方向に列車で約1時間40分程度の Havant (ハヴァント) という片田舎で、初めて乗馬に接し、週一程度で数か月トレーニングを受けた経験があるからです。当時、プラスチック関連合弁工場に営業管掌取締役として出向していましたが、その地域は日本人が合計で10人程度しか住んでいないという、超牧歌的場所で、勤務先の工場から車で15分程度のところに牧場があり、そこで乗馬を教えてもらえることを知り、開始した次第です。指導してくれたのは19歳の女子大生で、2時間程度のトレーニングで費用は全て込みで、なんと3,000円程度でした。

他の海外での乗馬で印象深いのが、フランスの北西部のノルマンディー地域圏にある海沿いリゾート「Deauville (ドーヴィル)」での早朝乗馬。白馬に跨り、浜辺の水際散歩は爽快でした。ところで、ここにあるドーヴィル競馬場では「ドーヴィル大賞典」という歴史のあるGIIレースが開催されますが、非常にラッキーなことに、日本の名ジョッキーである武豊氏が参戦されるとの情報を得て、急きょリアルな競馬観戦をいたしました。ちなみに武豊氏が騎乗した他のレースで勝った馬券は大穴的中で、シャンパンで祝杯を挙げたのは、楽しい思い出として残っています。

一方で中国・深圳の乗馬クラブで数回乗りましたが、ここでは「勝手に楽しんで」という感じで、林の中でこぼこ道を闊歩するとか、小川を乗り越えるなど、自由気ままに楽しませてもらいました。ただし、石ころだらけのあぜ道をギャロップ(「襲歩」と言って、競馬場でジョッキーが疾走しているのに近い)するのは楽しさと爽快さ半分・恐怖心半分でした。

日本に帰国後、乗馬と同じく英国で体験したレーシングカート(遊園地にある「ゴーカート」のレーシング仕様で時速80-100km以上の速度で走れる「カート」)の、どちらかをやりたいと考えましたが、日本ではどちらも、ちょっと・相当・猛烈に費用が高いことが判明。ギブアップを余儀なくされました。



ところが最近になり偶然に、比較的リーズナブルで自宅から足の便の良い乗馬クラブを見つけました。自宅のある最寄り駅から電車で2つ目の駅、そこからバスで15分程度、バス停から歩いて5分。自宅から合計でなんと40分程度。それではと、メンバー登録をし、日本での乗馬を再開した次第。ご参考までながら、ほとんどのメンバーは車、それも多くが高級外車。私のように電車・バス利用者は極めて希少。



さて、この乗馬クラブには約130頭の馬が飼われています。ほとんどが、皆様が耳にされたことがあろう「サラブレッド」です。そもそも「馬」は学名が「Equus caballus」で「哺乳綱奇蹄目ウマ科ウマ属」に分類される家畜動物です。そして馬の種類は解剖学的分類、用

途による分類など色々ありますが、もっとも特徴的なものとして下記があります。

1) 軽種：主に常用や、常用の馬車を牽くために改良された品種で、軽快なスピードと、ある程度の耐久力を持つように改良されている（サラブレッド、アラブ、アンダルシアンなど）

2) 中間種：軽種と重種の中間的性質を持ち、軽快さと比較的温厚な性質を持つ（クォーターホース、セルフランセ、アングロノルマンなど）

3) 重種：主に農耕や重量物の運搬のために改良された品種で、中世ヨーロッパでは重い甲冑を着込んだ重装備の騎士の乗馬とされた（ペルシュロン、ベルジャン、ブルトンなど）。北海道特有の競馬競争の一種「ばんえい競馬」で用いられており、ずんぐりした馬体は写真やテレビなどで目にされた方もおられるのではないのでしょうか。

4) ポニー：鬣甲（「きこう」、「たてがみ」）の下の背中の前端の盛り上がった部分）までの高さが147cm以下の馬の総称（シェトランドポニー、ミニチュアホースなど）

テレビなどの時代劇に颯爽と馬に乗り出てくる武士はよく見かけますが、テレビに使われているのは「サラブレッド」ながら、実際に武士の時代に乗られていたのは「重種」と言われています。そのような中で江戸時代、第8代将軍である徳川吉宗をモデルにしたテレビ時代劇における「暴れん坊将軍」の乗馬姿は秀逸・とてつもなく格好いい。さて、この徳川吉宗ですが、実際に馬の改良目的で西洋馬の輸入に特に熱心で、9度にわたって28頭を輸入したとも言われています。

ところで、皆さんはテレビなどで馬が「ヒヒーン」（英語で「neigh」・ネーイ）といななっている、あるいは歯ぐきをむき出しに笑っているような場面を見られたことはないでしょうか。このあたかも笑っているような表情は「フレーメン」（ドイツ語:Flehmen）と呼ばれ、臭いに反応して唇を引き上げる生理現象で、本当に笑っているように見えます。フォークシンガー当時の吉田拓郎氏の歌に「馬」というのがあります。歌詞は下記通り。

馬が笑ってる 馬が笑ってる  
でっかい口をおっぴろげて 馬が笑ってる  
（吉田拓郎氏の「馬」より抜粋）

さすが拓郎、非常にいい得て妙な表現描写の歌詞とは思いませんか。

人間と馬の関わりの歴史は大変長く、人類史が始まった5千年前からとも言われています。そのような馬との長いつながりですが、当然各国によって呼び名が違ってきます。

英国：horse

ドイツ：Pferd（プフェーアト）

フランス：cheval（シュヴァール）

イタリア：cavallo（カヴァッロ）  
スペイン：caballo（カバールジョ、カバールヨ）  
中国：マー  
タイ：マー  
韓国：マル  
ルーマニア：equus（エクウス）  
ギリシャ：ヒッポス  
ロシア：ローシャチ  
ポーランド：コイン  
マレーシア：kuda（クダ）  
オランダ：PAARD（パールト）  
ムーマニア：cal（カル）  
ハワイ：lio（リオ）  
チェコ：クーニュ  
ペルシャ：アスブ  
モンゴル：アドー

ついでながら、馬にまつわる英語表現を下記いたします。

馬の耳に念仏：in one ear and out the other

馬子にも衣裳：Fine feathers make fine birds.

馬が合う：hit off

バカ騒ぎ：Horseplay

重荷を背負う：saddled with a problem

大食いする：eats like a horse

自由を与える（手綱をはなす）：giving free rein

反抗して手に負えない（馬が銜<はみ>を歯でくわえて暴れる）：getting the bit between one's teeth

もらい物のあらを探すな：never look a gift horse in the mouth

日常的常識：horse sense

判断を誤る（負け馬に賭ける）：backing the wrong horse

最後となりましたが、馬に関する格言として下記があります。

「立派な人が立派な馬に乗っているのは、この世でもっとも高貴な物の姿である。

人に与える一番素晴らしい賛辞として、その人のことを馬と呼んだっていいくらいだ。」

立派な人になるべく、乗馬を続けていきたいと考える今日この頃です。



(相棒の「ハヤト」と共に)

以上